

配になりました。日ざしがあたたかくなるにつれて、深い雪をふみわけて水路の見まわりをする豊助の姿が毎日のように見られました。

若松の城下にシシ舞いの笛の音が流れ、今年の春は土手がぐずれなかつた喜びを味わいながら、工事を始めようとするころ、滝沢山の谷間に準備しておいた資材が、水かさを増した川の勢いに流されてしまいました。それでも、工事は進められました。水路はどんだんのびて、やがて、遠く若松の城下を見通すところまでやってきました。

洞門どうもんにいとむ

用水路の工事を進めながら、同時に解決しておかなければならない大問題が、つねに豊助の頭から離れませんでした。それは、飯盛山いもちやまの洞門どうもんをどうやって掘